

# BORDER

佐倉吹雪

## ◆登場人物

風炉見泰三／青木利男  
老婆（繭田タネ）／繭田イネ  
おりしままりん／マクロ／幼いたネ  
帆掛船夢太郎／裁判長  
ハナ／刑事風（アルマ）  
管理人／カクリ

博愛者  
博識者  
見識者  
有識者  
よこしまたち（以下様々な役をカバーする）  
・ヨ、コ、シ、マ  
・新聞記者たち  
・消毒者たち  
・警備員たち  
・保健所職員  
・家の者  
・近所の人  
・カクリの家族  
・上司  
・人々  
など

暗闇に浮かび上がるひとりの男。風炉見役の役者である。  
それはまるで今まさに死刑宣告を受けようとしている罪人が、生命の最後の叫びを、陪審員に向けて、傍聴人に向けて、果てはマスメディアを通じて知るであろうすべての国民に向けて、なんの効果も見返りも求めぬ、むき出しの心を吐露するかのような、そんな独白である。

男 これは、世にも稀なる人間の成れの果ての物語だ。語るに醜悪なその日々を、俺は暴き出し、人目に晒す物語として織りなして行く。その先を一体誰が見届けるのか。この俺が咀嚼し、吐き出すそれらの事象を、消化し、血肉となし、骨とする人間がいるのかいないのか、それを審判する物語だ。そして同時に、この俺自身への裁判だ。これを目にするあなた方は、俺を審判し、そしてまた自分自身を裁判することになるだろう。その覚悟があるのなら、今、この三文芝居の幕を上げよう。忘れるな。この瞬間、たった今から、あなたとこの俺は、同じ罪を舐め合う共犯だ。

男は闇へと消えていく。

人々は不安になる。

ゴロゴロと音がする。

なんだろう？

と、唐突に、世界は明るくなる。

見ると、横縞の衣装をまとった人たちがラインカーを縦横に走らせていたのだ。  
便宜上、名も知れぬ彼らを「ヨ」「コ」「シ」「マ」とでも呼ぶこととする。

彼らは線を引くことに憑りつかれてでもいるようだ。

ヨ おい、お前、ちょっとそこはみ出してんじゃねえか？

コ 何いってんだ。お前の方こそ、はみ出してんじゃねーかよ。

ヨ なんだとこら？

コ なんだとこらとはなんだ。

ヨ お前こそなんだとはなんだ。

コ いいか、ここはなあ、おれの場所なんだよ。

ヨ なに言ってやがる、ここは昔っからおれの場所だよ。  
コ お前こそ何言ってやがる。昔の昔から俺の場所だ。  
ヨ 昔の昔の昔っから俺の場所。  
コ 貴様、恥ずかしくないのか！ 人の土地によこしまな気を起こしやがって。  
ヨ よこしまなのは貴様のほうだ。  
コ いいや、お前がよこしまだ！

などともめている隙に、人の引いたラインを消して、新たなラインを引いていく者が出てきたりするものだ。

シ 漁父の利！

そして、密告し、余計に事態をややこしくする者も……。

マ ちよつとちよつとだんな方、いいんですかい？  
ヨ あっ  
コ あっ  
ヨ おい、てめえ、なにしやがる。  
コ てめえが線引いてるそこはなあ、  
二人 おれらの場所であつ。  
シ なんだよお前ら。  
ヨ 同盟だ。  
コ ああ、同盟だ！  
マ あらいやだ、さっきの敵は今の友ねえ。

彼らは突然ストップモーションになる。

と、もっともらしい格好をした識者たちがもっともらしく現れる。

博愛者 このようにして人類は有史以来、まあいい地球に好き勝手に線引きをして来た。そして今も引き続けているのです。  
博識者 地球の線引きだけでは飽き足りない人類は、ごく身近な自分の隣にも線引きのネタはないかと虎視眈々と狙っております。

ラインカーの男、博愛者と博識者の間にラインを引く。

博愛者、コホンと咳をして、ラインカー男を追い払う。

もっともらしい識者たちの演説のさなか、ひとりの見るに醜悪な老婆（繭田タネ）が現れて、お茶を淹れ始める。

その手つきはひどく不器用で、よく見ると指は曲がり、そのうち何本かは欠けているのかもしれない。

顔もひどく引きつって、足は引きずりがちである。

視界もかすんでいるのか、顔を対象にくつつかんばかりに近づけて作業をしている。

醜悪で不器用な老婆は、しかしそれを補って余りある丁寧さで、誠実に、お茶を淹れていく。

まるで愛おしく大切な儀式でもあるかのように。

だが誰一人、その様子を気にする者はなく、滑稽なシンポジウムは続行されるのである。

博愛者 我々はこれらすべてのラインを、消して消して消しまくらなくてはならないのですッ。

博愛者、ヒステリー発作のような激しさで博識者との間のラインをその足で揉み消す。

と、真っ白い服を来た人々が現れ、モップのようなものすべてのラインを消していく。

博愛者 消して消して消して消して、けっして揺るぐことなく消し続けるのです。つまりところ我々ニンゲンは、すべての人類を、いや

もう生命すべてを、等しく、平等に、愛さなくてはならないのですッ。

拍手を贈る聴衆。喝采を全身で受け止め、非常に満足そうな識者たち。

新聞記者と思しき人々が取り囲み、取材をしている。満足そうに、鷹揚な態度で答える博愛者、博識者。

記者たちは明らかに識者たちにおもねっている。

ある記者 ペちやくちや、ペちやくちや、ペちやくちや！

博愛者 ペーラ、ペラペラ。ペラペーラ。

記者たち おおう。(感嘆の声)

またある記者 ペちや、ペちやくちや？

博識者 ベーラ、ベラベラ、ベラベラのベラ。

記者たち おおおおー。 (感嘆の声)

囲み記者の一番外側に、風炉見がいる。自分も何か聞こうと必死の試みをするも、はじき出されてしまう。

風炉見 あの、あの！ ちょっと！ すいませーん。

さらに弾き飛ばされる。

博愛者 ペラ、ペペラペラ、ペラペーラのペラペラ。

得意げな識者。

風炉見 なんだ、何を言ってるのか僕にはさっぱりわからない。おい、僕にも質問をさせろ！ おい、おいってば！

風炉見は、ボディガードなのだろうか、やけに体格のいい男にタックルをするとその男の首根っこにぶら下がる。

風炉見 これがほんとのぶら下がり取材か！？ 難民の入国について！ 受け入れる？ それとも受け入れない！？

風炉見、振り落とされ、転がる。

風炉見 核心をついたな。よし、突撃だ！ 突撃あるのみ！！

風炉見、今度は識者と記者の塊に体当たりを試みるがするりとかわされてしまう。  
風炉見が派手に転んだ隙に、そのおかしな囲み取材は終了したようだ。  
記者たちは、拍手をしたり、握手を求めたりして、去っていく。

風炉見 おい、おい。待てよ！ 俺はまだ何も聞いていない！！

風炉見の叫びは無視される。

その会合は満足のうちに散会したようだ。

場面は識者たちの控室へと変わる。

当然、風炉見だけは満足できず、物陰に隠れてその場に紛れ込む。

風炉見は全く取材に参加できなかったことに対して負け惜しむ。

風炉見 ばかめ。真実は囲み取材なんかじゃ剥き出すことなんてできんのだ。取材の真骨頂、それは、スパイだ。敵の懐深く潜り込んでこそ、真実を暴き出すことができる。敵のあばら骨の隙間に潜む建前という贅肉を取り去った本音という名の骨にこそ価値があるのだ。俺は真実のための諜報員、スパイだ。

風炉見が自分の失敗を正義にすり替えているその間に、先ほどの世にも醜い老婆が識者たちの前にお茶を配る。

博愛者 ああ、ありがとう。

だが、誰一人そのお茶には手をつけず、それぞれ自分の懐から取り出したペットボトルのお茶を飲む。  
ペットボトルはカラになる。

のどの渇きはまだ癒えてはいないが、出されたお茶には決して手をつけないのだ。

そうしておいて、より弱い者のペットボトルを取り上げて行く。取られた者は更に弱い者から取り上げる。

だが誰も決して湯呑みには手をつけない。見ようとさえしない。

黙殺される湯呑みたち。

見識者 今日もいい仕事をしましたな。

博識者 まったく我々ときたら

博愛者 虐げられた者たちを解放し

見識者 職を与え

博識者 ラインを消し

見識者 実にいい仕事をしてますねえ。

博愛者 職を与えるだけではありませんぞ。

見識者 今年も近くの孤児院にランドセルを贈りました。

有識者 我が団体の名前がふたの部分に大きく、金色（こんじき）に刺繍されたあのランドセルですな。

博愛者 あれは非常にいい出来だった。

博識者 貰った子供たちはさぞ誇らしい気持ちになるでしょうな。

風炉見、猛然と取材に突入しようとするが、その前によこしまな警備員たちに両脇を抱えられ、抵抗しつつ、つまみ出されてしまふ。

風炉見の声は届かない。

博愛者 当然ですよ、キミ。

有識者 まったく我々ときたら

見識者 実にいい仕事をしてますねえ。

思わず目の前の湯呑みに手を出しかけ、ハツとしてその手を引っ込める一同。  
急に声のトーンを落として。

博識者 見ましたか、さっきの老婆。

見識者 お茶を運んできた？

博愛者 あれも我々が解放し、ここへ連れてきて、その上仕事も与えてやってるんです。

有識者 あの、醜悪な・・・

博愛者 コホン。

有識者 あ、いえ、なんの取り柄もなく、ただただ我々の血税を浪費するためだけに生きてきたようなあの老婆に、賃金を与えてやってるんです！

再び活気を帯びてくる。

博識者 素晴らしい。

見識者 実にすばらしい。

識者たち満足げに頷き合う。

博愛者 では今日のところはこの辺で。

見識者 我々はもう十分働きましたからな。

博識者 明日もこの調子でがんばりましょう。

見識者 お疲れさま。

博識者 お疲れさま。

博愛者 ほんとにほんとにお疲れさま。

識者たち、捌けていく、

老婆、とぼとぼと出てくる。

いっさい手をつけられなかったお茶をバケツに移す。

と、服も乱れ走り込んでくる風炉見。

勢いのまま、湯呑みのひとつをつかむとごくごくと飲み干す。

その様子を見た老婆はひどく驚き、手にしていた湯呑を落とす。

風炉見 あ、す、すみません。なんか、外で警備員とちよつと、あれしちやって、叫んだりなんかしたんで喉かわいちゃって。

老婆、ただただ風炉見の顔を見つめている。

風炉見 えつと……。

風炉見、思わず額の汗をぬぐう。

老婆、新しくお茶をつぐ。その手はひどく震えている。

風炉見 大丈夫ですか？ あの、僕、決して怪しいものじゃ……。

老婆、不器用な手つきでお茶を出す。

風炉見 あ、いただきます。

風炉見は老婆の手から湯呑を受け取るとなんのためらいもなく飲み干す。

風炉見 あー、うまい。

老婆はただただ感動しているようだ。

風炉見はそんな老婆の様子には気がつかないのか、あたりを見回している。

風炉見 あの、ここにいた皆さんは？

老婆 え。

風炉見 私、ここの皆さんに取材をしたくて……。  
老婆 取材？

風炉見、何か思いついたように老婆の顔を見る。  
老婆は恥ずかしいのだろうか、顔を隠すそぶり。

風炉見 そうだ、そう。あなた、あなたに話を聞きたい。どうせあいつらに聞いたって建前しかしゃべらないんだ。ここは、家政婦よろしく舞台裏をじっと見つめてきた、そんな人材に取材すべきだ。そうに決まってる。

老婆、風炉見の話など耳に入らないかのように、新しいお茶を丁寧に注いでやる。  
風炉見は、しゃべりすぎたのだろう。喉が渴いているようだ。

風炉見 ああ、すみません。

風炉見、一気に飲み干す。

老婆 うまいか？

風炉見 ええ、とても。

風炉見が飲み干すたびに新しいお茶が待っている。

まさにわんこお茶状態。

最初は誠実に応える風炉見だが、さすがにだんだん雑になってくる。

風炉見 や、や、もう十分。これ以上は飲むと決壊します！！

老婆、ひどく残念そうに風炉見に背を向ける。

風炉見、老婆の腕をつかむ。

風炉見 あの一！ ちょっと、待ってください。

老婆、腕を掴まれたことに非常に驚く。

風炉見はここでこの老婆にまで逃げられては、一日を無駄にしたことになってしまっても考えているのか、取って付けたよ  
うなセリフを吐く。

風炉見 あー、えーと。あの。あなたと私、以前、どこかで会ってやしませんかね？

老婆は目が悪いのだろう、顔を男に近づける。

うんとうんと、近づける。

老婆の顔にはありありと驚きの色が現れている。

風炉見、慌ててその手を放す。

風炉見 ナンパなんかじゃあ、ありませんよ。

老婆は先ほど掴まれた腕をさすっている。

風炉見 あれ？ 痛かったですか？

老婆、首を振ると、茶を注いだ湯呑を差し出す。

風炉見 え？ あ、ああ、どうも。

風炉見、茶を、すでにたふたふとなった胃袋に流し込む。

老婆、感動のまなざしでそれを見つめている。

老婆 うまいか？

風炉見 え、ええ。そりゃもう、とても。

老婆、さらなる茶を湯呑に注ごうとする。

風炉見は、慌てて老婆の手をつかんで止める。

老婆はその手をまたも感動を持って見つめる。

風炉見 あの！

老婆 ……。

風炉見 あの、えーと。日本における唯一のイルカ保護団体ってのはここですか？

例によって、口から出たデタラメだ。

自分のペースに巻き込めればなんでもいい、そういう戦法なのだ。

老婆 え？

風炉見 ここが、日本における唯一のイルカ保護団体ですか？

老婆 ええ？

風炉見 保護してます？ イルカ。

老婆 イルカ？

風炉見 はい。保護してます？

老婆 そうだね。

老婆のどこか心ここにあらずといった様子に、風炉見は苛立ち始める。

相手の方が一枚上手なのだろうか？

風炉見 そうとは？

老婆 きつとそうだろうよ。

風炉見 きつとと言うと？

老婆 ここはありとあらゆる者を保護してるからね。人間だろうがイルカだろうが容赦なく保護しているだろうよ。

風炉見 人間まで？ そうすると、あなたも保護されてるクチってわけですか？ 実はですね、僕はある孤児院を、取材していてこの慈善団体にたどり着いたわけなんですよ。

風炉見、懐から手帳を取り出し、耳に挟んだ鉛筆の先を舐め、メモを取る。

風炉見 保護されている心境について、一言お願いできますか。

老婆 保護……。

風炉見、老婆の口から漏れるであろう言葉を間違いなく捉まえようと待ち構える。  
老婆は遠い顔つきになる。

老婆 保護するのは捕まえて檻に放り込むことかい？

風炉見 檻？

老婆 それともしばらく飼いならしたそのあとで柵の外に放つことなのかい？

風炉見 飼いならしたあとで放つ？ ははあ。わかりました。動物園の動物をすべて解放せよ、のクチですね。

老婆 どのクチだった？

男 イルカは賢い動物だからどんなに数が増えたって決して殺してはならないクチで、そのくせ自分たちは血の滴るようなステーキを平気で平らげ、クリスマスには七面鳥だか九官鳥だかを大げさに騒いで食べるクチで、だけど、イルカやクジラを食べるのは野蛮だ  
って言うクチで、水族館にいるイルカも全部逃がしてしまえと声高なうえに高圧的に迫るクチです。

老婆 いったいどのクチがそんなことを言ってるんだい。

老婆、風炉見の口元をじっと見つめる。

風炉見 僕のクチではありませんよ！ いやだなあ、ほんとうですよ。いいですか、そもそも僕は、フカヒレは有識者の食卓で大歓迎を受け、イルカヒレは眉をひそめられる、この不条理！ この不条理にメスを入れたくてこうしてここに来ているんです。

老婆 イルカにヒレはないだろう。

風炉見 ありますよ！

老婆 え、あるのかい？

風炉見 いやしかし、食卓的にはないも同然です。

老婆 ないも同然……。

老婆はなぜだかますます遠い顔つきになっていく。

風炉見 いやー、鋭い！ さすがです。ないも同然を見抜くその洞察力。その洞察力を見込んで是非お話を。

老婆 ないも同然の話をかい？

風炉見 あなたが奉仕しているこの社会奉仕財団「世界浄化の会」の四方山話をです。

老婆 ここはそんな名前だったかねえ。

風炉見 忘れてしまったんですか、あなたは。あなたの属する社会を。

老婆 さあ。

風炉見 名前は？

老婆 浄化がなんとか……？ ああ、なんと言ったかねえ。

風炉見 僕が今聞いているのはあなたなの、あなた自身の名前です。

老婆 私の？ 私自身の？ 私の名前を聞くのかい？

風炉見 下心はありませんよ。

老婆 さあ、なんと名乗っていたか。

風炉見 恍惚の人！ 覚えてないんですか、自分の名を！

老婆 秘して語らず。名前とはそういうものだろう。

風炉見 奥ゆかしいにもほどがある。それでは名付ける意味がない。きょうび、動物園の猿山のサルにだって余すことなく名を与える。今に水族館の巨大水槽を回遊するイワシの群れにだって一匹残らず、与えられるだろう。名前とはそういうもんです。

老婆 動物園のサルよりも惨めな存在もあるもんさ。

風炉見 どういう意味です。

老婆 決めた。

風炉見 え。何を？ 何を決めたんです？

老婆 帰ることにしたよ。

風炉見 帰るって・・・。

老婆 檻の中に。

風炉見 檻の中！？ あなた、サルだったんですか！？

自由からの開放。

老婆、すべてを放り出すとどこかへ行ってしまおう。

風炉見 ちょっと、ちょっと待ってください！！

後を追う風炉見。

誰もいなくなる部屋。

白い服の者たちが現れて、部屋を消毒し始める。

しつこく、しつこく。やがて部屋は白く煙って消えてしまおう。

その靄の中から老婆が現れる。

老婆を追って風炉見が現れる。

風炉見 待ってください、待ってください。

老婆がはたと振り返る。

風炉見 実は私、この度、内部告発サイト、ウソリークスを立ち上げまして。最初のターゲットとして、さっきの組織に潜入を企てたという訳です。ぜひお話を。

老婆 私は何も知らないよ。もうほっておいておくれ。

風炉見 まあまあ、そう言わず。象のように大きな話も針の孔のような小さなところから洩れ広がるもんなんです。あなたが、僕の針の孔になってください。なあに難しいことじゃない。僕の質問に答えてくれる、それだけでいいんです。

老婆 質問？

風炉見 そうですね、まずは簡単などころから。あなたのお名前を教えてください。

老婆 憶えていないと言っただろう。

風炉見 どうして。

老婆 どうしてって・・・。

風炉見 どうして！ なぜそんなにも隠すんです？ 自分の名を！ 名乗るのが恥ずかしい名前なんですか？ トラとかクマとかグレ

ートデンだとか。気にしません！ ええ、気にしませんとも。気にしないでどこか、気に入らせてみせますよ、僕の方で！

老婆 ずいぶんと自信に満ちているんだね。

老婆、眩しそうに風炉見を見る。

風炉見 信念です！ 信念に満ちているんです。自信なんかじゃあ、ありません。困るんですよね。そんな風に誤解されちゃうと。ど

うするんですか、あなたのその一言が、この床板の割れ目から漏れ広がり、世間が僕のことを「自信に満ち溢れた男」なんて鼻持ちな

らない人物だと信じてしまったら！

老婆 幸せなことさ、信じるものがあるってのは。

老婆、その場を立ち去ろうとする。

風炉見 待ってください。雇い主を売ろうというのですから、自分の身が心配なんでしょう？ 安心して下さい！！ 情報源は誰にも漏らしはしません！

老婆、ゆっくりと振り返る。

老婆 密告はしないかと？

風炉見 ええ、もちろんです。密告なんてしません。そんなことをするやつはクズですよ！ もちろん僕はそんなことはしません。ですから、安心してお名前を！

見つめあう風炉見と老婆。しかし、やはり老婆は顔をそむけてしまう。

老婆 まずは自分から名乗る、それが礼儀じゃないのかい？

風炉見 ああ、そうだった。僕としたことがなんとという失態！ 大変申し訳ない。

老婆 そのくらいは知ってるさ。「世の中の常識」って本で勉強したからね。檻島でもその気さえあれば常識を身につけられるんだ。

風炉見 檻島？ なんですか、それは。

老婆 お前さん、行き先も知らず船に乗ったのかい？

風炉見 ちよっと待ってください。僕たち今、船に乗ってるんですか！？

なるほど急に船のエンジン音、波の音が耳に入ってくる。

横縞のいかにもマリン柄なシャツを着た船員たちがせわしなく動き回っている。

風炉見 ああ、確かにこりゃあ船だ。うっぶ。

急に具合が悪くなる風炉見。

横縞シャツの船員たちが即座に反応する。

よこしまたちはみな没個性で、誰が誰だか見分けがつかない。

よこしま どうした。

風炉見 急に船酔いが。

よこしま 船酔い！

よこしま 船酔いには塩水！

おそるべき連携プレーで、身を乗り出して海を汲み風炉見に渡すよこしまたち。

よこしま 鼻をつまんで目を閉じて、一気にぐいといくんだよ。

ためらうこともなくぐいといく風炉見。

風炉見は激しく咳き込む。

風炉見 おええええ。な、なんですか、これ。

よこしま 海だよ。

風炉見 うみい〜!!?!

よこしま 海に飲まれるから船に酔う。

よこしま 飲んでしまえば酔いはせん。

風炉見 すごい理屈ですね。

よこしま 何事も飲まれてはいけないということさ。

よこしま 長いものには巻かれるな！

風炉見 あの・・・、これ、どこに向かってるんですか？

よこしま 何を言ってるんだ、檻島に決まってるじゃないか。

風炉見 ああ、そうだった、さっきそう聞いた。で、なんです、檻島って。聞いたこともない。ちよっとキミ、地図持ってない？ 日本地図。

よこしまたちが地図を広げる。

それは数人がかりで広げる大きな日本地図。

風炉見 ……(地図が)でかいな。檻島、檻島。ねえ、キミ、どこにあるんだい、檻島は？

よこしま ひょうたん島を探してるのかい？

風炉見 ひょうたん島？ 何を言ってる。檻島だよ、檻島。

よこしま ああ、それぞれ、ひょうたん島。

風炉見 だから違うって。おーりーしーまー。いったいどうなってるんだ、キミの耳は。だいたいキミは人の言葉をちっとも聞いてないじゃないか。「お」と「ひよ」、「り」と「う」、「し」と「た」、「ま」と「ん」だろ、ほら音だっけ？ ずいぶん余る。おりしまだ、俺が知りたいのはおりしまおりしまおりしまー!!!

ずいぶんと暴れる風炉見。

よこしまたち だからそれがひょうたん島！

風炉見 えっ。

よこしま 檻島はひさごの形をしてるから。

よこしまたち ひょうたん島と呼ばれている。

風炉見 ひよっこり？

よこしまたち (思わず反応してしまう) ひょうたん島！

よこしまたちの目つきは風炉見を責めているようだ。

風炉見 わかった、悪かったよ。で。いったいどこにあるんです、僕らが向かっているその島は！

風炉見、地図の中を探す。

よこしま どこにもない。

風炉見 へ？

よこしまたち ひょうたん島はどこにもない。

風炉見 どういうことですか？

よこしま どんな地図にも載ってない。

風炉見 なぜですか？ 地図に載らない島なんて……。あ。ひよっとしてラピュタ的な？

よこしまたち ラピュタ的！？

風炉見 海の上をゆらゆらと浮遊して、思いもかけないところにある日ひよっこり姿を現すひょうたん島！ そうだな、そういうことなんだな！

よこしま 残念！

よこしまたち ブー！！

よこしま 檻島は動きはしない。

よこしま 動くのは人さ。

よこしまたち 人間さ。

風炉見 くそう、外したか。なぜだ、なぜだ、なぜ地図に載っていない！ わかった！ 今度こそわかったぞ。小さ過ぎるんだな！ 小  
さすぎて、縮尺的に点になってしまっただな！ 点だ、点を探せ！

改めて地図に向かう風炉見。

よこしま 檻島の面積。

よこしま 41,90キロ。

よこしま 大きさ的にはニッポン第38位。

よこしま 喜界島よりは小さいけれど、因島よりは大きいよ。

風炉見 喜界島、因島、どちらも地図に載っている！ なぜだ！ それなのになぜ檻島だけ地図にない！！？ おい、キミ、ヒントだ、  
ヒントをくれ！

よこしま 強引だなお前。

よこしま ゴーイングマイウェイだなお前。

よこしま いいさ、もったいぶるな。教えてやれ。

よこしま 存在してはいけない島。

よこしま だから地図にも載ってない。

よこしま それが檻島、檻の島。

風炉見 存在してはいけないって。

老婆 封印して忘れられた島、忘れ去りたい島。それが檻島だ。

風炉見 どんどんわからなさ加減が増えて行くんですけどっ！

とその時、にわかには色めき立つよこしまな乗組員たち。

よこしまたち 船が着くぞー！ー！。

風炉見 ちょっと待って！ まだ心の準備がー！

老婆 心の準備なぞ、いつだってなかった。

よこしま+老婆 あの日！

風炉見 なんなんですか……。

よこしまのうち幾人かが保健所の職員と化して、消毒を始める。

一人の男（よこしま）が布団に横たわり、その男を必死でかばう家の者（これもよこしま）。

家の者 うちは違います、うちはただの脚気です！

保健所職員 嘘をつくな！

保健所職員 ネタはあがってんだ！

家の者 ほんとなんです、ほんとに脚気なんです。

保健所職員 脚気だと？ 見てみる、この足。

横たわった男の膝を拳で殴る。

ぴょーんと足があがって、その様子を覗き込んでいた他の職員の鼻を直撃する。

保健所職員 これのどろが脚気だ！  
保健所職員 連れて行け。

横たわっていた男は寝ていた布団にぐるぐると簀巻きにされ、担ぎ出される。  
保健所職員たちは盛大に消毒を始める。  
泣き崩れる家の者たち。

家の者 おしまいだあ。おしまいだよ。うちはもうおしまいだあ〜。

職員たちは近所の人に変貌する。

近所の人 ちよつと、ちよつと、奥様、お聞きになりましたあ？

近所の人 向こうの辻の辻野さん。消毒、してたらしいわよお、保健所が。

近所の人 まあ、怖い。

近所の人 なんでもご主人が連れて行かれたんですってよ。

近所の人 んまー。

近所の人 もうあのお宅もおしまいな。

近所の人 いやだわあ。ご近所であーんな恥ずかしい病気が出るなんて。

近所の人たち 業の病（ごうのやまい）！

近所の人 身体が腐り

近所の人 鼻はもげ

近所の人 世にも恐ろしい姿に

近所の人 なるんですってよ！

近所の人 アレにかかるなんて、よっぽど前世で悪いことでもしてきたんでしょーよ。

近所の人たち くわばらくわばら。

近所の人 そのうえ奥様、ちよつとも近づくとうつるんですつて。  
近所の人たち いやああああああ。  
近所の人 しつかり消毒してもらわないとね！  
近所の人 あらっ！ 噂をすれば！！

家の者が顔を隠すように出てくる。

近所の人 ちよつと、あんなに出歩いてんのよ。

近所の人 空気が汚染されちゃうじゃないのよ！

近所の人 どこ行くつもりよ！

家の者 あの、ちよつとハローワークまで。

近所の人 ふざけんじゃないわよ。

近所の人 出歩くんじゃないわよ。

近所の人 汚い息吐くんじゃないわよ。

思わず息を飲む家の者。

近所の人 勝手に空気吸ってんじゃないわよ。

近所の人たち 凶々しい！！

近所の人、ラインカーを持ち出してくると、自分たちとの間に線を引く。

家の者 え、あの、ちよつと何を・・・。

近所の人 いい？ こつから一歩でも、いえーセンチ、いいやーミリ、ーミクロンでもはみ出したら、もう、容赦しないんだからね！  
家の者 そんなことしたら、ハローワークどころか、買い物にさえ行けなくなっちゃいます。

近所の人 はあ！？

近所の人たち 買い物!?

家の者 育ち盛りの子供もいるんです。仕事にも、買い物にも行かなきゃならないんです。

近所の人 ふざけるんじゃないわよ。

近所の人 そうやってアレを撒き散らそうってハラだね!

近所の人 こちとら、お前んとこみたいな家が同じ村に出たってだけでご近所の村に恥ずかしくってしょうがないんだよ!

近所の人たち、ヒステリックになり、怒りに任せて家の者に石つぶてを投げつける。

近所の人 家から出るな!

近所の人 この村から出て行け!

近所の人 一家で行きやあよかったんだよ!

近所の人たち ひょうたん島に!!

泣き崩れる家の者。

風炉見 ちよっと待ったあ!

人々はまるで時を止められたかのようにストップモーションになる。

風炉見 なんですか! 今の三文芝居。

演じた人々 三文芝居!?

風炉見 そういう島なんですか!? 檻島は。

よこしま 何言ってるんだい、今更。

風炉見 今更?

よこしま キミ、バカンスにでも行くつもりだったのかい。

よこしまたち バカンス!

風炉見 バカンスって、あーた・・・。

よこしまたち バカンスなのか!?

風炉見 そんなわけないだろうツ。

よこしまたち バカンスじゃないのか!

風炉見 あたりまえだ!! バカンスでも、観光でもない!!

僕は! 正義のために! ここへ! キターーーーー!!!

明らかにがっかりしているよこしまたち。それはもう、ありありと。

風炉見 え、なに? なんて?

と、そのとき。

声 嘘をつくんじゃないよ!!!!!!

風炉見 誰だ、誰だ、今言ったヤツは!

皆、顔を見合わせている。

と、船室から濃くて大きなサングラスに大きな帽子、スカーフを首に巻きつけいかにもバカンスといった出で立ちの女、ハナが現れる。

ハナ いつだってそうよ!

風炉見 なんですか、あんた。いかにもバカンスってナリして。

ハナ あんたたち旅行者は何も知らない。知らないくせに何もかもを知ってるつもりで残酷な善意を押し付ける。

ハナの凄みがあった物言いに風炉見はタジタジだ。

風炉見 なっ、なんの話ですか。あなたのほうが見るからに旅行者じゃ・・・

ハナ 知ろうとしない素人たちはその無知というムチを、振りかざして見せる間もなく、あたしたち真実を知る者を打ち付けるのよ。  
よこしまたち そうだ、そうだ！

見るからに高慢な女の登場に風炉見はうろたえる。

風炉見 違いますよ！ てか、あんたほんとに誰！

ハナ 何が違うっていうの！ この島でかつて何があったのか、そして今何があり続けているのか。知りもしないで！  
よこしまたち サイトシーイングー！！

ハナとよこしまたちの息はぴったりだ。

風炉見 ほんとに違うんです！ 僕は！ 僕はその真実を、あるひとりのご婦人がその懐に隠し持っている真実を追いかけて、こんなところまで来てしまった！ ・ ・ ・ だけなんです！ 僕は無実だ！

ハナ 無実？

風炉見 少なくとも、あなたの言う罪には値しない男だ、僕は。

ハナ 捕まったヤツはみんなそう言うわ。「僕は無実だ」って。

風炉見 いや、ほんとに。

ハナ そしてそれが真実であればあるほど、嘘になっていくの。

風炉見 言ってる意味がよく・ ・ ・

ハナ おまえは嘘をついている。

風炉見 嘘なんかついていない！

ハナ 嘘の上塗り。

ハナの言葉に煽動されたよこしまたちのシュプレヒコール。

よこしまたち うっそつき！ うっそつきー！！ うっそつきー！！

風炉見 えん罪だー！

一瞬、時が止まる。

風炉見 なぜだろう、この台詞。たしかにいつか、どこかで聞いたような、気がする。

時が戻ると、なぜだか男を値踏みする審判は冷静に進んでいる。

ハナ 悪趣味ね。

風炉見 えっ、何ですか？

よこしまたち 悪趣味。

風炉見 悪趣味？

ハナ 女の懐を覗き見ようだなんて、悪趣味通り越してそれはもう立派な犯罪よ。

風炉見 ちょっと待ってください。さっきから一方的に。なんなんだ！ 何様なんだ、あんた。

ハナ アナタには関係ない。

風炉見 関係ないなら！ 関係ないなら口を出さなくてください。これは僕の仕事なんだ。

ハナ げすな仕事。

風炉見 げす？

ハナ げすの極みよ！

よこしまたち げすの極みー！

風炉見 いやちよっと待って。僕はバツなしの独身だし、好感度が売りのタレントに手を出してそのタレント生命を台無しになんかしたりなんかしてないぞ。

ハナ 人様の秘密を売りにしてるくせに？

風炉見 それは・・・。

ハナ それは？ それはなあに？ ほら、言ってごらんさいよ。

風炉見 違うんです。僕が売りたいのは・・・いや、これも違う。売る訳じゃない。金のためじゃない。真実を、暴きたいんです。

ハナ 真実を暴く？

風炉見 それも、晒されるべき真実を。この世は欺瞞に満ちている、そう思いませんか！ 善人面して、平気で人を、かよわき他人を踏みにじる。僕はそういう奴らの鼻を明かしたいんです。

ハナ 何のために？

風炉見 何のためって・・・それは・・・公共の福祉ですよ！

ハナ 聞いた？ 公共の福祉、ですって。

ざわつくよこしまたち。

風炉見 悪いんですか！ 僕が公共の福祉を名乗っては。

ハナ 公共の福祉ほど怖いものはこの世にはないわ。

風炉見 え。なんで。

ハナ 公共の福祉はか弱き人から人生やミカン畑を奪ってきた。

風炉見 なんの話をしてるんだ。

ハナ ねえ、明かされるべきはアナタの鼻じゃないの？

風炉見 え。

ハナ あんたみたいな男が一番胡散臭いのよ！

風炉見 ちょっと待ってください。どうしてそんなにこの僕を疑うんですか！ なんですか、なんなんですか、あなた。そんな黒眼鏡なんかかけて。よくないなあ。そういう疑いのフィルター越しに人を見るのは。

ハナ そういうアナタは思い込みというフィルター越しに世界を見るんじゃない？

風炉見 なんとというけんか腰！ もう、もう僕のごときは放っておいてください。あなたには関係ないでしょう。僕はこのお婆さんに……。

いつの間にか老婆はいなくなっていた。

風炉見 あれ！ どこ行っちゃったんですか、僕の運命の女神！

途方にくれる風炉見を尻目にハナはさっさと船を降りる。  
よこしまたちはこれに従う。

風炉見 待って！ 放置しないで！

ハナを追って船を降りかける風炉見。

と、そこへ出迎えの人々（よこしまたち）が押し寄せる。

ハナはくるりと振り向き、くるりと態度を変えて。

ハナ ようこそ、ひょうたん島へ。

よこしまたち ウエルカムトゥーひょうたんアイランド。

風炉見 はあ！？

ハナ さあ、早くそのタラップを降りてきて。

風炉見 は、はあ。

風炉見、戸惑いながらもタラップを降り始める。

島の管理人が駆け寄ってきて。

管理人 何をしている、さっさとお荷物をお持ちしないか。

よこしまたち、風炉見の荷物を取り上げる。

残ったよこしまたちは風炉見の腕を取りタラップを降りさせる。

風炉見 やめてください。商売道具なんですよ。返して。

管理人 野暮なことと言わないでください。

風炉見 え。

管理人 ここはバカンスの島、ひょうたんアイランド。

よこしま 商売なんて忘れて。

皆 サイトシーイング！

ハナ ゆっくり楽しんで。

風炉見 だからバカンスじゃないんだってば。

よこしまたち またまたあー！

風炉見 大体、あなたさっきは僕をあんなに激しく責めていたじゃないですか。何ですか、なんなんですか、その手のひら返しは！  
ハナ あなたの正義感はおくわかったわ。

風炉見 僕を、試した・・・？

ハナ あなたはここへ、この島へ、来るべき人よ。それが運命。

風炉見 どういう意味ですか？

ハナ ゆっくり楽しんで。

風炉見 いや、だから・・・。

管理人 さあ、宿へご案内して！

風炉見 僕の意味は！？・・・あれ、なんだろう、この憤りは、いつかどこかで感じたことがあるような・・・。

笛が汽笛を鳴らす。

よこしまたち 船が出るぞー！

我に返る風炉見。

風炉見 待って！ 行かないで、船！！

風炉見、船を振り返るが、既に港を後にしていた。

よこしまたちは船に手を振っている。

風炉見　なんだ？　胸が痛い。締め付けられる。遠ざかる船とはこんなにも人の胸を締め付けるものだったか？　なんだか、ここに来て僕はやけにへんだ。

ハナ　船旅は人間をセンチメンタルにさせるものよ。

風炉見　船旅をしたという実感はまるでないんだが……。

よこしま　お客さん、こっちですよ、早く来て。

風炉見　いつから僕はお客さん扱いになったんだ！

よこしま　宿にご案内します。

風炉見　取ってない、取ってない。宿なんか取ってない。

よこしま　帰る船はないんだぜ。

よこしま　野宿でもするつもり？

風炉見　そんなつもりはないが……金もない。

よこしま　心配するな。

風炉見　そう言われても……。

ハナ　あなたは特別よ。

風炉見　特別って。

よこしま　招待されたんだよ、キミは。

よこしま　この檻島に！

風炉見　招待？　この俺が？

よこしま　ち　イエースー！！

風炉見　そんな訳ないだろう！　そもそも招待されるいわれもなければ、何かの懸賞に応募した覚えもない。そんな俺がなぜ！

よこしま　ち、値踏みするように風炉見を見る。

ハナ　あなた、ジャーナリストなんてでしょう。

風炉見　ええ、まあ。自称ですけど。(ひどく小声で)

よこしまたち え？

風炉見 立派なジャーナリストです。

唐突に、やたら派手な、そうまるでチンドン屋のようなスーツを着こなした男が登場する。  
彼の名は帆掛船夢太郎。この島の長である。

帆掛船 ジャー……ジャーナリストウツッ！

風炉見 ああああ、びっくりした！

帆掛船 そこを見込んでー！

風炉見 誰？ 今度は何？

帆掛船 申し遅れました。私、この度、檻島改め、ひょうたん・ザ・アイランドの島長に就任いたしました帆掛船と申します。

帆掛船、風炉見に名刺を渡す。

風炉見 とうちよう？（名刺を見て）ああ……。

帆掛船 島のおさと書いて島長。決してはげ上がった頭のこの部分のことではありません。

風炉見 村長みたいな感じですね。

よこしま 昨日までは村役場の係長。

風炉見 え？

帆掛船 えー、ごほん、ごほん。この度この檻島を、ひょうたん・ザ・アイランドと名を改め、一大リゾート地として再開発、再売り出しすることになりました。で、まず手始めにマスコミ関係者を招待することにしたんです。なかなかいい作戦でしょ？

風炉見 マスコミ関係者？

帆掛船 はいい。

風炉見 なんか勘違いしてますよ。

帆掛船 え？

風炉見 僕は招待なんかされてないし、招待状だって受け取ってないんですよ。

帆掛船 招待状、お渡ししましたよ。  
風炉見 もらってません！　そもそもこの島に来たのもたまたまなんです。え、なに？

よこしまが先ほどの名刺をひっくり返して裏を見せる。

風炉見 え、さっきの名刺・・・の裏？　・・・あつ。招待状って書いてある、手書きで・・・。

帆掛船 いやあ、さきほどの船にたまたまあなたのような方が乗っていたとは。ツイてる！　いやあ、持ってるなあ、ワシ！

風炉見 わたし、招待されたんですか？

帆掛船 今、この島は絶賛売り出し中なんですよ。是非先生にはこの島を堪能、満喫していただいて、この島の素晴らしさを全世界に発信していただきたいんです。

風炉見 先生？

帆掛船 お願いします。

よこしまたち お願いします！

その熱意にたじろぐ風炉見。

風炉見 かいかぶり！！！！

帆掛船たち え？

風炉見 僕は、ジャーナリストと言いましたが、実はまだ自称の域を出ていない駆け出しでして・・・。

帆掛船 大いに結構！　いいじゃないですか！

男 え？

帆掛船 このひょうたん・ザ・アイランドもいわば駆け出しの観光地。駆け出し同士、ここはひとつダッグを組んで、一旗あげようではありませんか。

よこしま 島長も駆け出しだもんね。

帆掛船 余計なことを言うんじゃないよ。

何か考える風の風炉見。

風炉見 …… 駆け出し同士で一旗あげる……… 面白いかもしれません！

よこしま 単純だな、コイツ。

風炉見 単純！？ 大いに結構！ シンプルイズベストです！！

帆掛船 仰る通り！

風炉見 ジャーナリズムにも箔が必要。これで名をあげれば僕の発信力も増すつてものだ。その上、ここであのお婆さんの取材もできれば一石二鳥。

帆掛船 え？ 何か言いました？

風炉見 いえいえいえいえ。全世界に！ イケますよ！！ イかせてみせます、僕の方で！

よこしま なんかイヤラシいな。

風炉見 イヤラシイ！？

帆掛船 さあ、先生をご案内して。

よこしま 本日のお宿にご案内します。

よこしま さあさあ、こちらへ。

歩きだす一行。

管理人、宿帳を広げて。

管理人 えーと、お名前は……。

風炉見 風炉見です。風炉見泰三です。

よこしま 風呂見たい？

よこしま なんかイヤラシいな。

風炉見 ふろみ！ たいぞう！！

帆掛船 いいお名前です、風炉見先生。

風炉見 どうも。

管理人 寝室は離れを用意しております。

よこしま 特別室ですよ。

風炉見 特別室！ いや、悪いなあ、そりゃ。

帆掛船 ほんとうに悪いと思っっているのですか？

帆掛船の口ぶりにギクリとする風炉見。

風炉見 え。ええ、そりゃあ。

帆掛船 そーんなこと思わなくていいんですよ！ 風炉見先生は大事な大事なゲストなんですから。

風炉見 は、はあ。

帆掛船 さあ、着きました。

舞台は宿の広間となる。

風炉見 ここですか？ なんか質素、あ、いえ、結構シンプルなんですネ。

帆掛船 シンプルイズベスト、ですよ。

風炉見 はあ・・・。

よこしま、縦縞の、部屋着のような衣服を持って来る。

よこしま こちらにお着替えください。

よこしま 下着まで全部準備してあります。

風炉見 ああ、ありがとうございます。あとで、着替えます。

帆掛船 今、お願いします。

風炉見 今、ですか？

帆掛船 ええ。今、ここで。

風炉見　ここであって。いや、こんなところでは。

よこしま、ガラガラと試着室のような箱を押してくる。

よこしま　こちらで。

風炉見　ええ？

よこしま　さあ。

風炉見　はあ。いや、でも……。

帆掛船　いち早く！　くつろいでリラックスしてもらいたいです。

風炉見　じゃあ、失礼して……。

帆掛船の圧力に気圧され中に入る。

よこしま　脱いだモノはこちらへ。

脱衣室の中からゆつと手が出て、脱いだ衣服が箱の中へ。

その服はどこかへ持っていかれてしまう。

入れ替わりにポンプのようなものを持った人が現れ、脱衣室の中に噴霧する。

たまらず、風炉見、咳き込みながら飛び出してくる。

風炉見　わあああ、なんなんですか！

帆掛船　アロマです。

風炉見　はあ？

帆掛船　リラックスのためです。あしからず。

風炉見　あしからずって……。だいたいアロマって、もっといい匂いがするもんじゃないの？

うな、学校の保健室のような……。　なんだ、この匂いは。夏のプールによ

よこしま お好きでしょう？

風炉見 はあ？ なんなんですか、さつきから、キミ、僕を変態扱いして。．．．あれ？ 僕の荷物は？  
よこしま お預かりしています。

風炉見 お預かりって、部屋のほうに運んでくれるの？

帆掛船 必要なものは！

風炉見 え？

帆掛船 すべてこちらで用意いたしますので。

風炉見 用意しますって、携帯と取材ノート、財布も．．．どこへやったんです？

帆掛船 帳面もカメラも新しいものを準備しています。お金はここでは必要ありません。

帆掛船、指を鳴らす。

よこしまたち、それらを持ってくる。

風炉見 携帯は？

帆掛船 必要ありません。

風炉見 必要ないってあなたが決めることじゃないでしょう。

帆掛船 風炉見さん！ いいですか、あなたはここにヴァカンスに来てるんですよ！ そんな！ 外部との連絡なんて。ハッ。ヴァカンスの邪魔ではありません！

風炉見 でも、ホラ、ここでのヴァカンスな日々をSNSで発信しなきゃ。全世界に発信で。あなたがさつき自分でそうおっしゃったでしょう。

帆掛船 愚かな！

風炉見 は？

帆掛船 わあ。美味しそう！ ちょっと待ってちょっと待って。写真、撮るから。ん、ちょっと向きが違うかな？（皿を動かすマイム）よし、これでいい。あー、ちよつとよけて、写り込んで。あー、はいはい。よしと。パシャ！ 待って！ そっちからも撮ってくれる？ はい。パシャ。

風炉見 何の真似ですか、いったい！

帆掛船 シラけないかね、シラけないかね？ 素晴らしいお店で、素晴らしい料理が運ばれてきたまさにそのときに、有無を言わせぬこのゴイングマイウェイ。

風炉見 その点は激しく同意します。

帆掛船 オマケにだよ、気を取り直して、「いただきまーす。あッ、おいしーい。これすごく美味しいね、ってあれ？ 食べないの？」  
「ちよつと待って、今、ブログに投稿してるから。」

風炉見 最悪だ。

帆掛船 まだあるぞ。「次は二年生男子による徒競走です。」「よおし！ ハルトの出番だぞ！ お前、カメラは任せたぞ！」「あなたビデオはお願いね！」「任しとけて、あれ、どこだ、どこだ、我が息子！」

風炉見 なぜ、肉眼で見ないー！ー！。自分のその目に焼き付けるよー！ー！

帆掛船 そういうことなんだよ、風炉見くん。

風炉見 言いたいことはわかりました。

帆掛船 あなたならわかってくれると信じてました。

風炉見 しかし僕は決してそんな無粋なやつらとは違います。携帯の使用についてはTPOをわきまえて・・・

帆掛船 集中してもらいたいんです！ このヴァカンスに！ そのためには携帯は、不要だ。

帆掛船、携帯を折る。

風炉見 なにするんですかあああ！

帆掛船 心配は無用。これは私の携帯です。

風炉見 ええっ。あなた、ちよつとどうかしてるんじゃないですか。

帆掛船 ここでは私が法律、いえ、憲法です。改正不可能なね。おおつと、そんな怖い顔しないで。すべてはお客様のため。ここにあるのはそういった類いのルールです。浮き世を忘れて楽しんで貰うための。そのためには世間との連絡を一切絶つ！ それが大事なんです。風炉見さん、おおつと、この呼び方もよくない。どうしても世間を思い起こさせる。

風炉見 あなたさっきほめてたじゃないですか、この名前。

帆掛船 ここでは別のニックネームで呼び合うことに決まってるんですよ。

風炉見 ニックネーム、ですか。

帆掛船 そうですなえ、あなたは、そう、青木さん。

風炉見 青木？

帆掛船 青木利男さん、これでいきましょう。

帆掛船、管理人が手にした宿帳の名前をサラッと書き換える。

風炉見 あおきとしおって！！！ そんなニックネーム聞いたことがない。それではまるで別名、偽名じゃないですか！

帆掛船、風炉見の口を手で覆う。

帆掛船 シー————！！ 偽名だなんて人聞きの悪い。いいですか、これはあくまで、世間からあなたを、あなたがたお客さまを守るためのアイディアなんです。

風炉見 アイディア？

帆掛船 忘れないでください。ここは別世界なんですよ。

帆掛船の勢いに圧倒されてしまう風炉見。

風炉見 別世界……。

帆掛船 青木様をお席にご案内して！！

と、風炉見改め青木の周りに「お席」が作り上げられる。

よこしま さあさあ、座って座って。

よこしま 青木さま。

風炉見 だから僕は青木なんて……

よこしま ナプキンつけて。

よこしま、風炉見の襟元にまるで涎掛けのようなナプキンをつける。

風炉見 ちよっと、なんですか、これ。

管理人 汚すと困りますからねえ。

風炉見 ええ？ そんな子供じゃないんだから・・・

管理人 着替えは一人2着。それつきりですからね。

風炉見 はあ？ なんなんですか。

戸惑う風炉見の耳元で帆掛船が囁く。

帆掛船 デイナーショウの始まりですよ。

照明が落ち、ミラーボールのようにきらめく灯り。

音楽に乗って、ひとりの少女、おりしまりんが歌いながら登場する。

白い肌白い髪、真っ白な衣装に身を包んだその姿は、透き通るように神秘的である。

まりん ♪わたしは人形 かわいい人形

スノードームの中が私の世界

わたしは人形 哀しい人形

ガラス越しの景色 歪んで見えるの♪

風炉見はまるで魅入られたかのようにただただ少女を見つめている。

風炉見 まるで人形だ。いや、自分でそう歌っているのだから、ほんとうにそうなのかもしれない。こんなにきれいな少女を僕はこれまで見たことがない。

ひとしきり歌い終えると、沸き起こる拍手喝采。

まだ茫然としている風炉見。

まりんは風炉見を見つけ、見つめる。

風炉見はドギマギとする。ごくりと唾をのみこむ。

吸い寄せられるように腰を浮かしかけたその時、よこしまに脇腹をつつかれ、我に返る。  
よこしまは拍手を促している。

風炉見  
え？ あ、ああ。

風炉見、慌てて懸命な拍手を送る。

まりんは満足げににっこりほほ笑む。

風炉見はさらにドギマギする。

まりん  
今日はどうもありがと。みんな、楽しんでる？

みんなに向けてのまりんの言葉にいちいち反応してしまう風炉見。

まりん  
今宵、この時間、この空間はこの私おりしままりんワールド。

湧きあがる歓声。

まりん  
私の世界、スノードームにみんなを招待するわ。さあ、瞳を閉じて。私の声に集中して。

目を閉じる風炉見。

風炉見が瞼を閉じると同時に舞台の照明も落ちる。

暗闇の中、まりんの声だけが聴こえてくる。

まりん

♪悲しいことも霧の中

夢の見方もわからない

私は人形 羊水人形

目覚め方を知らぬ 標本人形

私は人形 蛹人形

紡がれない糸を 吐き出す人形

ガラス越しに 移ろう世界

瞳に映し カゲロウの生

La La La・・・♪

灯りが入るとそこは別の世界。

風炉見が血の付いた日本刀を持っている。

周りを人々（よこしま）が取り囲んでいる。

人々 刀を捨てる！

風炉見 えっ。

その言葉で風炉見は初めて自分の手に日本刀が握られていることに気づく。

風炉見 うわあああ。

風炉見、刀を放り出す。

男たちいっせいに風炉見に飛びかかる。

と言ってもサスマタのようなもので取り押さえるのである。

風炉見 何をするんですかあッ！  
よこしま キサマこそ何をした！  
風炉見 何って、何も。

刑事風の男が現れる。

それは先ほどの高飛車な女ハナに似ている。

刑事風 この男を殺したな。

どさーっと一人の男がうつぶせに倒れる。  
血まみれである。

風炉見 えええええええええ。

刑事風 この男を殺したな。

風炉見 こっ、殺してません。

刑事風 どうして殺した！？

風炉見 だから殺してませんって。

よこしま お前、こいつを知ってるな。

風炉見 知りませんよお。

よこしま こいつの顔をよよく見ろ！

よこしまの一人が、男をごろんとひっくり返す。

風炉見 あっ。

その顔は先ほどの管理人に似ている。

風炉見 こ、この人。

刑事風 やはり知っていたな。

風炉見 いやいや、さっき知ったばかりで。

刑事風 何故殺した！

風炉見 殺してませんって！！

全員 ウソをつくな！！！！

あまりのことにどうしていいかわからない風炉見。

風炉見 ウソなんて……。

よこしま ネタはあがってるんだ！

風炉見 ネタって。

刑事風 凶器だよ、凶器。

刑事風は、ポケットから白いハンケチを出すとそれで日本刀をつまみ上げる。

刑事風 何故、お前の手にあつた？

風炉見 わ、わかりません。僕にもさっぱり、なんでそんなものが、僕の手の中に……。

刑事風 血がべっとりついてる。

刑事風、血の付いた刃を風炉見に向ける。

風炉見、思わず顔をそむける。

刑事風 貴様の指紋も残ってるだろうな、べっとり。

全員 お前が犯人だ！……！！

風炉見、ぐるりと取り囲まれる。

風炉見 ちよっと、待って。

刑事風 何故殺した！

風炉見 話を聞いてください！

よこしま お前がやったんだ！

風炉見 違う！

よこしま 全部、分かってんだよ！

風炉見 誤解だッ。

刑事風 青木利男。

風炉見 いや、それ、名前も違いますから。

刑事風 お前を逮捕する！

風炉見 違う、違う、ちが……俺は知らない、何もしてない！ 冤罪だああああああ！！

ストップモーション。

照明が落ちる。

歌声が聞こえる。

まりん ♪私は人形 惨めな人形

歌えど届かない ガラスケースの中

私は人形 あやつり人形

積み木は崩れてく 世界が壊れる♪

照明が戻ると、部屋には風炉見とまりんしかいない。

しかし、そのまりんは髪が黒々としている。  
その女はまりんではなかった。  
名前をマクロという。

マクロ ねえ、どうなさったの？

風炉見 え？

マクロ 急に会いたいだなんて。

風炉見 僕が？

マクロ ええ。

風炉見 キミに？

マクロ ええ。なんか話があるって。

風炉見 話？

マクロ ええ。

風炉見、じっとマクロの顔を見つめる。

風炉見 ああ、そう、確か、何か言おうと思ってたんだ。なんだったっけ。

マクロ あなた自身のことだって言ってたわ。

風炉見 僕自身のこと？

マクロ ええ。

風炉見 おかしいな。自分について、僕は語るほどのストーリーは持っていないんだけど。

マクロ あなたのことなら、何もかもを知りたいわ。

風炉見 何もかも？

マクロ ええ。

風炉見 何もかもか。そうだな、僕は・・・まず、僕は親を知らないんだ。

マクロ 知らないって？

風炉見 捨てられてたんだ、僕は。犬猫のようにね。

マクロ 橋の下に？

風炉見 施設の前に。

マクロ だったら橋の下よりはいいわ。

風炉見 たちの悪い孤児院でね。ずいぶんひどい目にあった。

マクロ かわいそう。

風炉見 おかげで今の僕がいる。

マクロ どういうこと？

風炉見 偽善を暴くことを生業としている。

マクロ ぎぜん？ なりわ・・・？？

風炉見 悪者をやっつけるんだ。

マクロ ああん。

風炉見 そしていつか必ず自分を捨てた母親を見つけ出す。

マクロ お母さん？ お母さんに会いたいんだ？

風炉見 復讐のためにね。

マクロ ふくしゅう？

風炉見 やっつけるんだ。

人々の波が押し寄せて二人を飲み込んでいく。

人々は手荒く消毒をし始める。

その奥から飛び出してくる痛々しい家族。

母 うちは違います、うちはただの猫背です！

保健所職員 嘘をつくな！

保健所職員 ネタはあがってんだ！

母 ほんとなんです、ほんとに猫背なんです。おまけになで肩。

保健所職員 そりゃあ、さぞ肩が凝るだろうな。  
保健所職員 連れて行け！

父親が簀巻きにされて連れて行かれる。

子どもたち お父ちゃーん。

母 おしまいだあ。うちはもうおしまいだあ。

その様子を見ていた風炉見。

風炉見 ひどいことするなあ。なんなんですか？ あれは。

風炉見は思わず顔を歪める。

そんな風炉見を管理人に似た男、カクリが見逃さなかった。

カクリ おい、おまえ。

風炉見、気づかずにまだ成り行きを眺めている。

カクリ お前だよ、お前！

風炉見 え、私ですか？

カクリ お前、そうだな。

風炉見 え？

カクリ 同じ病気だ。

周囲の人々が明らかに顔色を変える。

風炉見 同じ病気？ 今の人と？ いや、僕は猫背でもなで肩でもありませんよ！  
カクリ 右の頬が左のそれより上がっている。

風炉見 ええ？ そんなの、病気じゃないですよ！！ ちょっとこう、ニヒルに笑っただけで……

カクリ 問答無用！

風炉見 今、ほら、ほら、見てください。ふつうでしょ、ほら。

カクリ、見る。

カクリ 連れていけ！！

風炉見 ちょっと待って！

サスマタを構える人々。

風炉見 冗談じゃない！！

風炉見は恐るべき機敏さでかわして逃げる。

よこしま 逃げたぞ！

よこしま 追え！ 追え！！

カクリ 絶対に逃がすんじゃないぞ！！！！

人々、風炉見を追って去る。

カクリ 間違いない。やつはマジロウ病だ。消毒しろ！

白い服を着た人たちが押し寄せ、消毒していく。  
その作業に紛れて場面は移ろう。  
風炉見はいつの間にかすっかり青木が板についている。

マクロ どうなさったの？ そんなに息を弾ませて。

青木 キミに興奮してるんだ。

マクロ まあ、うれしい。

マクロ、青木に抱きつく。

青木はマクロを押しやって。

マクロ 何？ どうしたの、あなた。

青木 ねえ、キミ、僕をよく見てくれ。

マクロ 素敵よ、トシオ。とってもニヒル。

青木 やめてくれ！！！！

マクロ ごめんなさい。何か気に障った？

青木 僕はニヒルなんかじゃない。二度というな。

マクロ わ、わかった。

青木 ねえ、マクロ、改めて聞くと。僕はどこがおかしなところはないかい？

マクロ いいえ、ちつとも。

青木 僕は、病気なのだろうか。

マクロ、青木の首筋に手を当てる。

マクロ 熱はないわ。きっと気のせい。だってほら病は気からって言うでしょう。

青木 僕は病気な気がしない。

マクロ だったら、それは「病氣」ではなくて、「元氣」なのよ。

青木 そうだよな。僕は元氣だ。まったく元氣だ。

マクロ ねえ、いったいどうしたの、あなた。

青木 なんでもないよ。そう、少し、肌寒い気がしてさ。

マクロ だったら、それは気のせい、「氣候」のせいよ。私が温めてあげるわ。

青木 本当？

マクロ 大好きよ、トシオ。

マクロ、青木を抱きしめる。

人々（よこしまたち）が押し寄せる、場面が変わる。

ひと 大変だあゝゝゝ。大変だあああああああ。

びと カクリが、カクリが殺されたあああああ。

刑事風 誰だ！ 誰がやった!？

刑事風の手下たち、死体にかげられた筈をはぐる。

死んでいたのはカクリ。

カクリの家族もよこしまが演じる。

ひと こりゃ、ひでえ。

びと めったざしだあ、

刑事風 怨恨だな。

ひと 怨恨だ。

びと いったい誰がカクリを怨んでいたんですか？

ひと いい人だった!

びと 仕事熱心で。

ひと 家庭を大事にした。

カクリの妻 あんたあ。あんたあ。誰が、誰がこんなひどいことを！

カクリの子供たち お父ちゃん！！

カクリの母 息子くくくく。

カクリの妻 どうしてこんなことに！

刑事風 奥さん、任せてください。必ず、必ず、犯人を捕まえて見せます！！

カクリの妻 お願いします、刑事さん。

刑事風 聞き込みだ！ 聞き込みに行くぞ！

散っていく人々。

人々、聞き込まれる。

刑事風 カクリはマジロウ病を取り締まっていたんだな。

ひと 憎むべき病だ。

ひと マジロウ病は人に交じろうとし、

ひと 混じっては繁殖していく。

ひと あさましい病だ。

刑事風 犯人はマジロウ病の患者か・・・。

ひと マジロウ病の患者はみんな収容される。

刑事風 だな。

ひと でも、逃げた男がいたんだ。

刑事風 逃げただと。

ひと カクリはその男の名を当局に密告した。

刑事風 恨みを買ったな。

ひと 逃げた男の名は？

全員 青木利男。

刑事風 そいつが犯人だ。青木利男を追え！！

人々、青木を探して追いかける。

青木、逃げている。

追いかけてくる人々。

青木 待つて！ 待つてくれ！！ 俺は人を殺したりなんかしてない！！

刑事風 証拠はあがってんだ！

青木 どうせ、ねつ造だろ！

刑事風 青木利男、キサマを逮捕する。

後ろ手に縛られ、腰縄を巻かれ、法廷に突き出される青木。

裁判長は帆掛船に似ている。

しかしその裁判が開かれているのはディナーショウの行われていた食堂で、ご飯を食べている人がいれば、掃除をしている人がいるなどいたっておかしな状況に陥っている。

裁判長 青木利男。お前は罪を認めるか？

青木 認めませんよ！ これは誤認逮捕なんです。僕は無実だ。

裁判長 証拠も押収されている。

青木 だからそれはねつ造なんです。だいたいなんでこんな島のこんな食堂で裁判なんかやってるんですか。おかしいでしょう。裁くな  
らちゃんとした裁判所でやってくださいよ！

裁判長 それは無理だ。

青木 なぜですか！ こんなの人権の侵害でしょう。

裁判長 残念だな。

青木 何がですか。

裁判長 青木利男、お前に人権はない。

青木 はあ!?

裁判長 なぜならばお前は、マジロウ病だからだ。

その言葉を合図に照明が変化し、時が止まる。

すなわちストップモーション。

まりんの歌声が響いてくる。

まりん ♪ガラス越しの景色歪んで見えるの♪

照明戻る。

みな、席につき、談笑しながら食事を楽しんでいる。

管理人 青木さま、どうかされました?

風炉見 わあああああ。

皆、風炉見に注目する。

風炉見 あ、あなた、生きてたんですか!?

管理人 冗談はよしてくださいよ、お食事楽しんでいらっしゃいますか?

管理人は風炉見に何か料理をサーブしていたようだ。

まりんは各テーブルを回って客との会話を楽しんでいる。

風炉見 いや、なんかすみません。疲れてるのかな、なんか眠っちゃったみたいです。

管理人 そうですか。まりんちゃんの歌声は心地いいですから、いや、無理ありません。ここでは日常の喧騒を忘れてまりんちゃんに癒されちゃってください。

風炉見 は、はあ。

管理人、立ち去る。

代わってまりんが近づいてくる。

まりん どう？ 楽しんでる？

風炉見 え、ええ、もちろん。

まりん ここ、いいかしら？

風炉見 え、ええ、もちろん！！

まりん、風炉見の前の席に座る。

まりん お名前は？

風炉見 風炉見……。

管理人、激しく咳ばらいをする。

風炉見が思わず振り返ると、「それは違う」というように首を振り合図を送る。

風炉見 ……青木、利男です。

まりん え？

風炉見 青木、利男。

まりん トシオって呼んでいい？

風炉見 え、ええ、もちろん。

まりん トシオ。

風炉見 あれ。なんだこのデジャブ感。ねえ、僕たち前にどこかで会ってない？

まりん 今時そんな口説き文句、流行らない。

風炉見 いやほんとに。

まりん だったら気のせい。

風炉見 気のせい？ それ、この前も、キミがそう言った……気がする。

まりん トシオ。

風炉見 え。

まりん あなた私に気があるの？

風炉見 そんな、まさか。

まりん あら、ガツカリ。

風炉見 き、興味はある。

まりん ほんとう？

風炉見 もちろん。

まりん 例えばどんな興味？

風炉見 女性に年を聞くのは失礼だし、えっと、そうだ、出身は？

まりん ここよ。

風炉見 え。

まりん ここ。

風炉見 ひょうたんアイランド？ あ、そのころは檻島か。あ、それで、「おりしままりん」。

まりん で。あなたは？

風炉見 え？

まりん あなたはどうしてここにいるの？

風炉見 僕はどうして……ここにいらんだろう。

風炉見、思わず立ち上がる。

暗転。

まりんの歌声が響く。

まりん ♪面影を見る キミの中

壊したくて 甘い

この胸の疼きよ

零れ落ちる刻(とき) 手のひらに

壊れゆく私 刻み付けて♪

場面は変わる。

貧しい家で貧しい病の床に臥せている一人の年老いた女、繭田イネ。

イネは風炉見が追ってきた老婆にどことなく似ている。

イネの枕元に立つ風炉見。

風炉見は、イネに古ぼけた上っ張りを見せる。

風炉見 僕は、この上着に包まれて施設の前に置き去りにされたんです。へその緒もそのままに。

イネはただ苦し気な呼吸をするだけである。

風炉見 見覚えありませんか。

イネ うう・・・む。

風炉見、上着の内側を指し示す。

風炉見 ほら、ここ。ここを見てください。継ぎが当たってるでしょう。黄八丈の。この継ぎはぎは実に個性的だ。それで覚えていた人

がいたんですよ。これはあなたのものだ。そうでしょう？

イネ これは・・・これは・・・

風炉見 あなたのもの、ですね。

イネ、上っ張りを瘦せた胸に抱きしめる。

風炉見 あなたが赤ん坊を捨てたんですか。

イネ、かぶりを横に。

風炉見 しかし、これはあなたのものでしょう！

イネ、かぶりを縦に。

風炉見 だったら、あなたが犯人だ。

イネ、咽び泣く。

イネは男の憎しみのまなざしを耐え、やっとのことで、その枯れ果てた唇から言葉を絞りだすのだった。

イネ 私はあなたの母親ではないんだ……。

風炉見 だったらなぜ！ 僕はこれに包まれて捨てられたんです！ それともなんですか！？ 捨てた赤ん坊だから関係ないとも言  
うんですか！？

イネ これは……これはね、娘に……娘に……

風炉見 娘？ あなたの？

イネ あの子は、タネは……たった九つでこの家を出て行った……。

風炉見 家出、ですか？ 九つで？

イネ タネ……タネ……。

風炉見 タネ、それが名前？

イネ、風炉見の手を握る。

風炉見 ああ、こんなにも痩せ細った手をして。どうして、その女は、こんなにも痩せ細った自分の母親を捨てておくのだ。

イネ 私のことはどうでもいいんだよ……。

風炉見 その女は、僕の母親は、自分の親も、子も捨てた、そうですね。

イネ、必死にかぶりを振る。

イネ あの子を……あの子を許しておくれ。

イネ、息を引き取る。

暗転。

スポットライトに浮かび上がる風炉見。

風炉見 私の母親はとんだ売女なんです。9歳の時に家出をしてそのまま消息不明。親が死んでも帰らなかった。男と遊び歩いて私とい  
う赤ん坊を生んで、捨てたんです。きつと父親も誰だかわからない、そんな赤ん坊だったんでしょ。おくるみがわりのぼろ切れはあ  
る工場の女工の制服だった。その工場には当時女工が20人いた。私はしらみつぶしにあたりました。その中に繭田タネの母親イネが  
いた。彼女ははつきり覚えていた。その制服の継ぎ当てを。これは自分のものだと、タネが持って行った自分の制服だと言いつりまし  
たよ。死の床で。ええ、彼女はじつと私の目を見たまま息を引き取りました。彼女は待っていてくれたんだ。私に証言するために、死  
を先延ばしにして待っていてくれた。そのときのイネの目は悲しみに満ちていた。死の床でも母親を苦しめたその女、繭田タネを  
私は絶対に許さない、そう決めたんです、その日に。

舞台は明転する。

そこでは裁判の続きが行われていた。

刑事風 被告人は母親に捨てられ、世の中を怨んでいた。

風炉見 待って下さい！ 確かに僕は捨て子です。だからと言って！

刑事風 お前は誰彼かまわず復讐の刃を向けるそんな人間だ。そんな恨み体質のお前は、その汚らわしい母親の業をも受け継ぎ罰を受け、そんな恐ろしい病気になったんだ。

全員 マジロウ病。

風炉見 なんなんですか、その強引なこじつけは！

刑事風 そうして卑怯者のお前は、当然の義務である「収容」を逃れようと画策した。そしてあるうことか、「マジロウ病患者は見つけ次第報告せよ」との御上の仰せを誠実に守り、当然の義務を果たしただけの善良な市民であるカクリをその手で殺した！！

風炉見 いい加減にしろ！

刑事風 いい加減にするのはキサマのほうだ！！

風炉見 いいですか？ 僕がなぜこの村に来たかと・・・アナタ、名前を何と言いましたか？

刑事風 アルマだ。

風炉見 なぜこの村に来たかとアルマさん、あなたに聞かれ、それでここまでどう来たか、その動機を僕は語ったんですよ。ただそれだけだ、それを、あんた、曲解し、捻じ曲げ・・・

刑事風 動機としては十分だ。動機は十分、物証もある。

風炉見 だからそっちの動機じゃなくて・・・。

刑事風 裁判長、判決を！

風炉見 待て待て待て。早いだろうッ、まだ審議も尽くされていないじゃないか！ 僕が不当に逮捕されてまだたった半日だぞ。

刑事風 半日あれば十分だ。

風炉見 そんなの・・・そんなのは人権侵害だ！

刑事風、激しく机を蹴る。

怯える風炉見。

刑事風 言っただろう！！！！ お前に人権はない。

それは歴史のひとコマを映し出すかのようにストップモーションになる。  
まりんの歌声再び。

その声の中で暗転していく。

まりん ♪教えてよ あの日

愛したの ほんと？

どんな罪も背負う 覚悟はあるの？ ♪

場面が変わる。

白い服を着た人々が消毒剤を構えている。

風炉見はその風景を傍観している。

風炉見 なんだ、これは。僕はまだ、夢を見ているのだろうか。・・・だとしたら、僕は、なんの夢を見ているんだ？

白い服の人々消毒を始める。例によってよこしまが登場人物を演じる。

母 やめてください！ うちは違うんです！

保健所職員 嘘をつくな！！

青年 消毒は、せめて消毒はやめてください。そんなことしたらうちはもう、ここで暮らしていきません。

保健所職員 邪魔をするな！ お前も連れて行かれないのか！

青年 なにを・・・。僕は感染してませんよ。

保健所職員 さあ、どうだろうな？ やれ！！

職員たち、激しく消毒する。

号泣する家の者たち。

職員たちは去り、絶望の家族だけが残される。

青年 大丈夫だよ、母さん。僕だってもう社会人だ。父さんの代わりに僕が支えるから。

そんな青年のところに上司がやってくる。

上司 キミ、もう明日から来なくていいですよ。

青年 え、どうしてですか。

上司 何とぼけてるんだ、心当たりがあるだろう。

青年 ちよっと待ってください。僕は違うんですよ、マジロウ病じゃない。

上司 わかってないな。

青年 何をですか？

上司 うちの会社をつぶす気か！

青年 は？ なんの話をしてるんです？

上司 いいか、そういう者が家族にでたというだけで、その家はしまいなんだ。そしてそういう者を雇ってるといっただけでこの会社もおしまいなんだよ。

とぼとぼと帰宅する青年。

妹がさめざめと泣いている。

青年 妹よ、どうした、なぜそんなに泣いている？

妹 おしまいよ、もう、何もかもおしまいよ。

近所の者たちが出てくる。

近所の人 ちよっと、ちよっと、奥様、お聞きになりましたあ？

近所の人 向こうの角の角野さん。娘さんが破談になったんですって。

近所の人 んまー、縁談がまとまったばかりなのにねえ。

近所の人 でも。

近所の人たち　しょうがないわよねえええええ。

近所の人たち　業の病ー！

近所の人　ついでにお兄さんのほうも、会社をクビになったんだって。

近所の人　んまーー！

近所の人たち　しょうがないわよねえええええ。

まりんの歌声とともに、スポットに風炉見が浮かび上がる。

風炉見　やめてくれ。

まりん　♪絶望を　抱いて

振り返る　未来

明日なんて二度と　来なければいいわ♪

やがてそれも瞼が下りるように消えていく。

照明が入るとそこは特別室。

管理人　さあ、こちらです。こちらが特別室。本日の寝室です。大丈夫ですか？　青木様。ずいぶん顔色がお悪い。食事が口にあいませんでしたか？

風炉見　あー、いえ。美味しかったです、十分。

管理人　ではほかに・・・。

風炉見　たぶん、ここんところずっと忙しかったんで、疲れてるんです。それで変な夢ばかり・・・。

管理人　でしたら今夜はここで何もかも忘れてどうぞごゆっくりお休みください。

風炉見　ありがとうございます。

管理人　では、また明日。ごゆっくり。

風炉見　あ、はい。おやすみなさい。

管理人 よい夢を。

管理人、去る。

扉の閉まる音。

と、ともに舞台は真っ暗になる。

風炉見 えっ。電気は……!? くそう、なんだよ、これ。なんも見えねー！

風炉見 ぶつぶつ文句を垂れながらあちこち探って、電気スイッチを探す。  
しかし見つからない。

風炉見 ほんとになんなんだ、ここは……。誰か！ 誰か、いませんか？ 誰か……！ 出してくれ……！ 俺をこ  
こから出せ……！ お……！

闇に飲まれる風炉見。

場面は移り闇の中にぼんやりと浮かびあがるまりん。

その背後には一面ガラス瓶が並べられ、ほの白い光を放っている。

まりん ♪会いに行くわ 今すぐ

キミの中 息づいて

苦しい思い出が 胸で叫ぶから

咲いたらダメと 運命られたふたり

花びらを持たぬつばみ つばみの花♪

その眩しい光の中に、まるで水銀灯に引き寄せられる蛾のように、おびき寄せられる風炉見。  
この世のものとは思えぬ美しい光景にただ見入っている風炉見。

まりんがそんな風炉見に気づく。

まりん だれ？

風炉見 あ。僕は……。

まりん どうしたの。こんな夜更けに。

風炉見 すみません。

まりん 私になにか用？

風炉見 あー、実は。

まりん 実は？

風炉見 この灯りをひとつ分けてはもらえないだろうか？

まりん え？

風炉見 僕のがわかれた部屋はひどく暗くて。

まりん 暗い？ どのくらい？

風炉見 それはもう自分が瞼を閉じているのか、開いているのか判別できないほどの漆黒。

まりん そう。それではじきに気が変になってしまうわね。

風炉見 ええ、そうなんです、まさに。頭がどうにかなりそうだ。だから、僕は今、心底灯りを求めているんです。

まりん そうだったの。

風炉見 この灯りの中からひとつでいいんです。貸してもらえませんか？

まりん この中からひとつ。

風炉見 ええ。

まりん それはできないわ。

風炉見 どうしても？

まりん だって選ばれなかった子がかわいそう。

風炉見 え？ だってただの灯りでしょう。

まりん いいえ。このひとつひとつの中に妖精が棲んでいるのよ。

風炉見 妖精だって！？

まりん ええ。私もこの中で育ったのよ。

まりん、ガラス瓶を愛おしそうにひとつずつ触れていく。

風炉見 真っ白い肌と真っ白い髪をもつその少女は妖精であるという事実を受け容れても全く違和感のない美しさでこの部屋に君臨していた。彼女の美しさにあてられたのだろうか、なんだか頭がクラクラしてきた。

まりん、つぶやくように歌い始める。

まりん ♪私は人形 かわいい人形

スノードームの中が私の世界

私は人形 哀しい人形

ガラス越しの景色 歪んで見えるの♪

風炉見 ここは、どこだい？ キミは誰？

まりん 私はまりん。おりしままりん。あなたは？

風炉見 僕は……あおきとしお。

センサーシヨナルな音楽。

人の波が押し寄せてまりんはマクロへと変貌し、場面は裁判の場所へと変貌する。

マクロは裁判の場とは別の空間にいて、青木の心に語りかける。

刑事風 カクリが殺されたその時間、お前はどこにいた。

青木 僕は……。

マクロ どうしたの、あなた？ あの日あの時、あなたは私と抱き合ってた。はっきりとそう言えばいいじゃない。青木 できない。

マクロ どうして？ ありのままを言えば、あなたは解放される。自由になれるのよ。  
青木 しかし！

マクロ このまま黙っていたら、あなた殺される。死刑になるのよ！！！！

刑事風 どこにいた！ 言え！！！！！！！！！！

青木 僕は……

マクロ あなたは

刑事風 おまえは！

青木 あの日

マクロ あの日

刑事風 あの日！

マクロ 私と家で抱き合ってた。

青木 ……ひとりで家にいた。

センサーシヨナルな音楽。

刑事風 つまり貴様にはアリバイはない。そういうことだな。

青木 それでも僕はやってない！！ 人殺しなんか、僕は知らない！！

刑事風 裁判長！

息の詰まるような緊張感。

刑事風 判決を。

裁判長は楽しんでいた食事の手を休め、ナプキンで口元を拭くと、息を一つ吸い込んで、一人の男の生涯に残酷な判を押す。

裁判長 青木利男、お前を、善良な市民カクリ殺しの罪で死刑に処す。

人の波が押し寄せ、人々は去る。

青木は風炉見に戻っている。

人々の波からはらりと落とされたのはあの女工の制服だ。

老婆（タネ）がその制服を拾い上げる。

風炉見 思い出しましたよ。

老婆 何をだい？

風炉見 僕はあなたにどこかで会ったことがあると言いました。

老婆 そうだったかねえ。

風炉見 その制服に見覚えありませんか？

老婆 ……

風炉見 あなたはその制服の持ち主、繭田イネによく似ている。

老婆 繭田イネ……

風炉見 知っていますよね？ 繭田イネ。

老婆 あんた……

風炉見 僕は自分の本当の名前を知りません。あなたは自分の名を隠しているけれど、僕は自分の本当の名前を隠しようもない。知らないんだ。風炉見泰三、これは施設でつけられた名前だ。あなたは名前もない僕を産んで捨てた、そうですね。

老婆 私には、資格がなかった。母親に、なっではいけなかった。

風炉見 そうでしょうとも。

老婆 でも、それでも、たまらなくこの手に赤ん坊を抱きたかった。

風炉見 勝手な……

老婆 他に道がなかったんだ。

老婆、淹れかけていたお茶を風炉見に差し出す。

風炉見は汚らわし気に払いのける。

風炉見 言い訳はやめてください！ あなたのおかげで、僕がどんな理不尽な人生を背負わされたことか！ 考えてみたことありますか！ ほんの少しでも！ 押しつけがましい善意、憐みの目、そして軽蔑。恵んでやったという優越感をやつらに与えるために僕は飼われていたんだ。欲しくもない金刺しゅう入りのランドセルをむりやり背負わされ、それはまるでみなしごの烙印だった。学校で給食費がなくなれば真っ先に僕が疑われる。「正直に言えば許してあげるよ」正直に言ったさ。僕はやってない、やってないんだ！ 施設の園長がなくなつた給食費を弁償する。「かわいそうな子なんです。許してやってください」勝手に僕の罪が、やってもいない罪が承認され、認知されていく。すべてはあなたが僕を捨てたから、あなたが僕を産んだからだ！

老婆は寂し気に湯呑を片付けながら。

老婆 ねえ、覚えてないかい？ おまえさんと初めて会った日のこと。あの日はずいぶんおいしそうに私の淹れたお茶を、何杯も何杯も飲んでくれた。

風炉見 あなたが何者か知らなかったからですよ。

老婆 嬉しかった……。

風炉見 だからなんです！

老婆 私の淹れたお茶なんて誰も手をつけないんだよ。

風炉見 知りませんよ、そんなこと。なんですか、お茶を飲んだか飲まないかくらいで。そんなことどうだっていいでしょう！ はっきり言っておく。僕はあなたを母親だなんて認めない。

管理人たち現れる。

帆掛船 認めない！ 認めない！ 絶対に認めない！！ 子供を産む？ ありえない！！ マジロウ病患者が子供を産む?? それは

最も忌むべき罪悪だ！

ハナ すぐに墮胎させましょう。

管理人 そもそも同居を許すからこんなことになるんだ。男と女、これは嚴重に引き離すべきだった。

ハナ その考えは軽率としかいいようがないわ。

管理人 なぜだ。

ハナ 男と女を隔てるのは簡単。でもそんなことをすればストレスがたまる。やがて不満のはけ口はこっちに向かってくるわ。

管理人 暴動か。

帆掛舟 それは困る。

管理人 いったいどうすれば……。

ハナ 男には女を、女には男をあてがって、腑抜けにすればいいのよ。

管理人 それでは子供ができる。

ハナ できないようにすればいい。

管理人 どういうことだ？

帆掛舟 断種か。

管理人 断種？

ハナ 子供を産めない体にするのよ。

帆掛舟 この島で婚姻を希望する者は、すべて断種手術を行うこととする！

今現在妊娠しているものはすべて墮胎させる！

管理人 胎児はどうしましょう？

ハナ 研究材料になるわ。

管理人 というと？

ハナ すべてホルマリン漬けに！

背後に浮かび上がるガラス瓶たち。  
それはまりんが愛でていたあの瓶たちだ。

よく見るとその中のひとつひとつに小さな天使が宿っている。  
まりんの歌声が響いてくる。

溶暗。

まりん ♪私は人形 かわいい人形

スノードームの中が私の世界

私は人形 かなしい人形  
ガラス越しの景色 歪んで見えるの♪

舞台上にはマクロがいる。

青木、走りこんでくる。

マクロ トシオ！

青木 マクロ、なんだい、話って。

マクロ 私、妊娠したの。

青木 僕の子かい！

マクロ 当たり前じゃないの。

青木 このお腹の中に僕の子が。

マクロ 私、幸せよ。

一瞬、家族を持つ幸せに打ち震える青木。

青木 だめだ、だめだ、だめだ！……！

マクロ だめって？

青木 この子は殺される。

マクロ 殺される？ どうして！

青木 僕はマジロウ病だ。マジロウ病患者は子を持ってはいけないんだ。

マクロ いけなくなつて、ここに居るのよ！ このお腹の中に！

青木 その子はお腹から引きずり出されるだろう。そして瓶詰にされるんだ！

マクロ この子は大根やキュウリじゃないのよ！ 漬物になんてさせないわ。

青木 どうする気さ。

マクロ 十月十日（とつきとおか）、このお腹で育て、産むのよ。当たり前のことをするだけ。

青木 だけどそれは許されない。僕たちに当たり前は許されないんだ。

マクロ 許されないって……この子は私たちの子よ！

青木 ……

マクロ トシオ！

青木 逃げよう。

マクロ え。

青木 二人でこの島を逃げ出すんだ。

マクロ どうやって？

青木 いいかい？ この子のことは、絶対に誰にも知られちゃいけない。そうして何気ないそぶりでも日を過ごし、次の新月の夜に二人で海を渡るんだ。

マクロ 海を渡る？

青木 君は泳ぎが得意だと言ったね。

マクロ ええ。いくらだって泳げるわ。

青木 二人の身体をしっかりと紐で結んで、向こうの岸に渡るんだ。遠浅だし、そんなに距離はない。大丈夫さ。

マクロ この子を守るためならなんだってできるわ。

青木、ストップモーションとなる。

マクロ 私たちは新月の夜、身に着けていたものを全部脱いで、頭の上に括り付け、手をつないで海の中に入っていった。遠浅の中を……

マクロのセリフは老婆へと引き継がれていく。

青木は風炉見へと変貌する。

老婆 遠浅の中を足の届く限り歩いて、それからあとは泳いで行った。お腹の中の小さな命のためだもの。ちっともつらくなんてなかった。生まれた子は男の子だった。

風炉見 あなた、マジロウ病患者だったんですか。じゃあ、9歳の時の家出って……。

イネの姿が浮かび上がる。

イネ 業の病だと言われていた。きっとそれは私の業だと、直感したんです。私は、夫の復讐を待つとる時に、尋ねてきた夫の戦友だという男と間違いを起こしてしもうた。その男の口から夫は死んだと聞かされたんです。その戦友はひと月あまりうちにおいて、そしてぱたっとどっかへ行ってしもうた。入れ替わりに死んだはずの夫が帰ってきたんです。やがて身ごもった私はその子がどちらの子なのか、自分でもわからなかったんです。そんなわけで私はその後生まれ下の子たちのように無邪気にタネを愛することができんかった。あいつに似るな、あいつに似るなと思えば思うほど、あの男に似ていくような気がして、タネを疎ましくさえ思うようになった。そんな時です、あの子が業の病にかかったのは。

白い服の保健所職員が押し寄せる。

マクロによく似た幼い頃のタネの姿。

幼いたネ かあちゃん、あたし島に行く。島に行くよ。

イネ タネ……。

幼いたネ だからお願い！ 家の消毒だけじゃありませんでください。消毒が近所のもんにバレたら、村八分にされる。仕事もできんようになる。

弟や妹も学校に行けんごとなる。お願いします。消毒だけは勘弁してください。

保健所職員 お前の場合は症状もまだ軽い。特別だぞ。

幼いたネ ありがとう、おじさん。かあちゃん、ごめんね。

イネ タネ、許しとくれ……。

幼いたネ かあちゃんの服もらっていい？ かあちゃんのおいのしみたヤツ。

タネ、黄八丈の継ぎはぎの当たった女工の制服を大事そうに抱えて家を出る。

イネ あの病気が罪だというならば、それはすべて私の罪。あの子は無実の罪を背負って、ひとり島に渡ったんです。だけど、私は心のどこかでほっとした。

幼いタネ さようなら、かあちゃん。さようなら。

イネ あの子をいらないものとして、やっと人目を気にせず暮らせるようになった。それ以来、手紙のひとつも出さず、忘れよう忘れようと生きてきて、忘れたつもりでいた、長いこと。それでも自分の人生の終わりに、あの子の息子が訪ねてきて、私は自分の罪を突き付けられました。

イネの人生に最後の波を立てたのが自分だと風炉見は気づいているのだろうか。

イネは消え、老婆が戻っている。

風炉見 家出ではなく、収容、されたんですか、檻島に。

老婆 生まれたのは男の子だった。

風炉見は青木に、幼いタネはマクロに変貌する。

青木 この子は手元にはおいておけない。

マクロ どうして？ 見て、こんなにかわいいのよ。

青木 僕らの子だってわかったら、この子は殺される。漬物にされる。

マクロ 見つからないように人目を忍んで育てればいい。

青木 マクロ、僕だってできればそうしたい、だけど。そんなことはできやしないよ。

マクロ どうして！

青木 僕らの病気は世間に忌み嫌われ、憎まれている。そのうち必ず気づくやつが出てくる。そうしたら、僕らは引きずり出され、この子は殺される。

マクロ この子に罪はないわ！

青木 たとえ殺されなくても、マジロウ病の親を持つというだけで、もうこの国では暮らしていけない。そんな噂が立っただけでこの子の人生はそこで終わりだ。

マクロ だったら、だったらどうしたらいいの？

青木 病気でない人に育ててもらおう。

マクロ この子を手放すっていうの？ 絶対にいや！  
青木 それがこの子のためなんだ。

ストップモーション。

老婆（タネ）に照明が当たる。

青木は風炉見に変貌する。

老婆 孤児院の前に、生まれたばかりのわが子を置いた。私たちは無一文で島を逃げだしたから、おくるみひとつ買ってやれなかった。島では、入所の時に外から持ち込んだものは全部取り上げられ、燃やされてしまうんだが、私はかあちゃんの服だけは、どうしてもあきらめられなくて、焼かれる前にこっそり取り返しておいたんだ。それを畳の下に隠して、ずっと大事にした。私の唯一の財産だった……。

風炉見 それがこの制服……。

老婆 子供を失った私たちは、あとはもうお互いしかなかった。人目を忍んで息を殺すように二人で暮らしてた。

風炉見 島に帰ることは考えなかったんですか。

老婆 そんなことをすれば、懲罰房に入れられちゃう。

風炉見 懲罰房？

老婆 窓ひとつない狭い部屋で、昼も夜もわからない暗闇に何日も閉じ込められ、出てくるときには皆おかしくなってしまっていた。それに……。

風炉見 それになんです？

老婆 娑婆にいれば、息子に会えるかもしれないだろう。たとえ名乗ることはできなくても。私たちは時々孤児院の前の電柱の陰に立ってたんだよ。とうとう見ることはできなかったけど、赤ん坊の泣き声がすればあの子じゃないかと思ってね。それだけでも幸せな気分になれたもんさ。だけど、それも長くは続かなかった。

風炉見 何が、あったんですか？

カクリ、現れる。

カクリ 間違いない。やつはマジロウ病だ。

マクロ、動き出す。

マクロ 大好きよ、トシオ。

マクロ、風炉見を抱きしめる。

人々が押し寄せる、場面が変わる。

ひと 大変だあゝゝゝ。大変だあああああああ  
びと カクリが、カクリが殺されたあああああ

人々の中に裁判長や刑事風が現れる。

風炉見は青木に変わっている。

裁判長 青木利男。お前は罪を認めるか？

刑事風 言っただろう!!! お前に人権はない。

マクロ トシオ、正直に言っ。私と一緒にいたって。大丈夫よ、私なら平気、島に連れ戻されても、懲罰房だって耐えられるから。

刑事風 つまり貴様にはアリバイはない。そういうことだな。

青木 それでも僕はやってない……。

裁判長 青木利男、お前を、善良な市民カクリ殺しの罪で死刑に処す。  
マクロ トシオオオオオオオオオオオ!

音楽。

青木 マクロ、僕は知っていたんだ。キミのそのお腹にまた新しい命が宿っていることを。今度こそ、手放さずに、キミに育てさせてあ

げたかった。

老婆の背後に無数の骨壺が浮かび上がる。

老婆 夫はろくな審議もされず、死刑になってしまいました。あつという間に審判がくだされ、あつという間に刑が執行されました。そんなことってあるんだろうかねえ。あつていいもんだろうかねえ。

老婆はゆっくりと骨壺を振り返る。

老婆 親族に迷惑をかけぬよう、名前を捨て、家を捨てたマジロウ病患者には骨になっても帰る場所がない。骨になったトシオは島のはずれにある納骨堂に並べられた。

風炉見 そのあと、あなたはどうしたんです。

老婆 結局、密告されて、見つかって、島に戻された。

風炉見 お腹の子は？

老婆 漬物にされた……。

たくさんの瓶の前にまりんの姿が浮かび上がる。

まりん ♪私は人形 かわいい人形

スノードームの中が 私の世界

私は人形 哀しい人形

ガラス越しの景色 歪んで見えるの♪

世界は闇に飲み込まれていく。

翌朝。

島の食堂。

鳥のさえずり。

朝食の支度ができているようだ。

帆掛船 青木さま〜。いかがでしたか？ この島でのヴァカンスは。

風炉見 ヴァカンス……。

管理人 携帯電話と財布、お返しします。

管理人、携帯電話と財布を渡す。

風炉見 あ、ああ。

帆掛船 満喫していただけました？

風炉見 なんだか……昨日までの自分ではなくなってしまったような……。

管理人 リフレッシュできたということですね。それはよかったです。

風炉見 よかった……？

老婆がお茶道具を盆に載せて通りかかる。

風炉見 あもう！

老婆、立ち止まる。

風炉見 お茶を一杯、いただけますか？

老婆の顔に喜びが広がる。

老婆 喜んで。

老婆、丁寧にお茶を入れ始める。

帆掛船 せっかく、島の外に仕事を見つけてやったのに、こうして戻ってきてしまうんだからね。

管理人 困ったもんだ。

帆掛船 我々の好意を無にする行為だよ。

管理人 おい、おまえ、なぜ戻った。

老婆はゆっくりと顔を上げて。

老婆 おこうでは誰も私のお茶を飲んでくれないんです。

管理人 は？

風炉見、老婆の入れたお茶をうまそうに飲む。

老婆は目を細めてそれを見ている。

風炉見 あの、まりんさんは？

帆掛船 まりん？

管理人 誰だそりゃ。

風炉見 誰って、ゆうべのディナーショーで……。

管理人 ディナーショーウ？

ハナ、あわただしく入ってくる。

ハナ おはようございます。島長。

帆掛船 おお、これはこれは宣伝部長。どうしたね、朝っぱらから。

ハナ いい子を見つけたんですよ！

帆掛船 いい子？

ハナ キャンペーンガールですよ、このひょうたん島の。

帆掛船 ひょうたん・ザ・アイランド。

ハナ 行けますよ、絶対いけます。全世界に旋風を起こすような掘り出しものです。帆掛船 ほう。で、どう売り出すんだい？

ハナ 名付けて、来世のエンジェル ホルマリンガール！

センセーショナルな音楽。

瓶詰になったマリンの姿が現れる。

人々は群衆となり揺れ始める。

風炉見 この島では

群衆 衣服が奪われ

群衆 持ち物が奪われ

群衆 名前が奪われ

群衆 人格が奪われた

風炉見 この病が無実だとわかってからも

群衆 衣服が奪われ

群衆 持ち物が奪われ

風炉見 家族が奪われ

群衆 名前が奪われ

群衆 赤ん坊が奪われ

風炉見 人格が奪われ続けた

群衆たちの叫び。

全員 無実の病

風炉見 この島でかつてあったこと

群衆 この国全体で起きた出来事

群衆 マジロウ病は結核や風邪よりも感染力は弱い

風炉見 貧しかった時代、体力の落ちた人々はそれでも罹患した

群衆 マジロウ病は人の命を奪わない

風炉見 偏見が人の命を奪っていく

群衆 マジロウ病患者は

風炉見 社会的に 物理的に 殺されていく

群衆 マジロウ病患者は自分を責め

風炉見 その家族もまた 自分を責めた

群衆 医学の発達で その病が克服されてからも

風炉見 人々は元患者と自分たちの間に線引きをし続けた

群衆 決して交わろうとしない人々によって

群衆 隔離され続けた人たちは

風炉見 ある日突然、線を越えろと言ひ渡された

全員 だがしかし！

群衆 超えて出たその先の社会には

風炉見 見えない無数の線がひかれていた

全員 彼女の出したお茶は決して手をつけられない

老婆がゆっくりと振り返って。

老婆 帰ることにしたよ、檻島に。私は、トシオにそっくりなあの子が、私のお茶をためらうこともなく飲んでくれたそれだけで、初めて、生きてきてよかったと思ったんだ。帰ろう、あの人の眠る檻島へ。死んでからもなお、島を出ることのできなかつた人たちの眠る、

あの島へ。

風炉見　ホルマリン漬けの赤ん坊たちが掴み取るはずだった未来

僕が浸かるはずだったかもしれないその薬液

瓶詰のまりんの魂の叫び

そして人間としての身ぐるみをはがされた人々の姿を

これから僕は全世界に向けて発信する

風炉見、携帯電話を高く掲げる。

それと同時に瓶の中のまりんが閉じていた瞼を開く。

センセーショナルな音楽が世界を飲み込んでいく。

《終幕》